

日本農学図書館協議会誌 212号 (2023年12月)

目 次

千葉県立西部図書館における博物館等との連携事業について 平塚 明子[ほか]	1
農村からの生産・生活情報を発信する『ルーラル電子図書館』 小林 誠	8
【海外図書館の最新動向 第30回】 ロッテルダムで開催された国際図書館連盟(IFLA)年次大会2023に参加して 長塚 隆	16
【書評・新刊紹介】 「オープンサイエンスにまつわる論点—変革する学術コミュニケーション」 一般社団法人 情報科学技術協会[監修], 南山泰之[編], 池内有為, 尾城孝一, 佐藤翔, 林和弘, 林豊[著], 樹村房, 2023年6月 棚橋 佳子	23
事務局報告	25

Bulletin of the Japan Association of Agricultural
Librarians and Information Specialists

No.212

December, 2023

ISSN 1342-1905

CONTENTS

Collaboration with Museums and Other Organizations of The Chiba Prefectural West Library
Akiko HIRATSUKA[et al.] 1

"Rural Digital Library" disseminating production and lifestyle information from rural areas
Makoto KOBAYASHI 8

【A Series on the Current Trend of Overseas Libraries: The 30th part of the series】
Participating to the 88th World Library and Information Congress 2023 hosted by the
International Federation of Library Associations and Institutions (IFLA) in Rotterdam
Takashi NAGATSUKA 16

【Book Review】
Yasuyuki Minamiyama[ed.], Ui Ikeuchi[et al.], "Open Science ni matsuwaru ronten –
Henkaku suru gakujutsu komyunikeshon", Jusonbo, 2023.
Yoshiko TANAHASHI 23

Note from JAALD 25

千葉県立西部図書館における博物館等との連携事業について

Collaboration with Museums and Other Organizations of The Chiba Prefectural West Library

平塚 明子、飯島 晃、森山 美恵、山崎 玲、赤沼 知里(千葉県立西部図書館)*

1. はじめに

博物館・図書館・文書館の連携については、平成20(2008)年頃には、国内外で注目されるようになっており¹⁾、千葉県でも、平成23(2011)年「千葉県立図書館の今後の在り方」が県教育委員会により策定され、県内大学図書館や類縁機関とのネットワークづくりがうたわれました。平成25(2013)年度には、当時の千葉県立中央図書館長の発案で、それまで展示や研修、講演会への講師派遣などの事業ごとに連携していた千葉県立中央博物館(博)、千葉県立図書館(図)がお互い顔を合わせて情報交換を行う、博物館と図書館による意見交換会がもたれるようになります。

このほか、平成26(2014)年度から令和元(2019)年度まで中央博物館が文化庁から補助を受けた「千葉県博図公連携事業」にも千葉県立西部図書館は図書館として参画しました。

本稿では10数年にわたる千葉県立図書館、特に著者らの所属する千葉県立西部図書館における連携事業について、報告します。

2. 図書館概要

千葉県立図書館は、千葉市にある千葉県立中央図書館(以下中央図書館)、松戸市にある千葉県立西部図書館(以下当館)、旭市にある千葉県立東部図書館(以下東部図書館)の計3館あり、各エリアの市町村立図書館等の援助をするとともに、県民への資料・情報提供サービスを行っ

ています。

各館で分野による分担収集を行い、3館の蔵書数は約146万冊です。当館は令和5(2023)年3月末現在、約29万5千冊の蔵書を保有し、重点収集分野の自然科学・医学・工学系の資料は新着図書の約8割を占めています。所蔵資料を活かして「健康・医療情報コーナー」の設置や調査相談業務、講座・イベントの開催など、県民の課題解決を支援するサービスを実施しています。

3. 資料展示による連携例

1) 県立図書館における展示

千葉県立図書館では、各館の展示スペースで定期的に資料の展示を行い、様々な資料を紹介しています。当館では、テーマに関してセレクトした資料を、主に貸出カウンター付近にリストとともに展示し、開催期間中であっても該当資料を貸出ししています(一部の参考図書等を除く)。

展示を行うことによって、普段素通りしている資料の存在を認識し、知識や思いの糧を提供することができます。企画やテーマは、季節や時事に即したものから県内類縁機関と連携したものまで多岐にわたり、図書館業務の大きな柱の一つです。

2) 企画展示 “日本植物分類学の父「牧野富太郎」”

①博物館との連携事業として

千葉県立西部図書館 〒270-2252 千葉県松戸市千駄堀 657-7

* Akiko HIRATSUKA, Akira IJIMA, Mie MORIYAMA, Rei YAMAZAKI, Chisato AKANUMA (Chiba Prefectural West Library), Chiba Prefectural West Library, 657-7 Sendabori Matsudo, Chiba Postal Code 270-2252

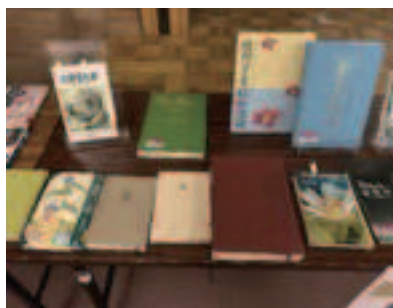


写真1 講演会場での資料展示の様子

当館では、令和5年1月21日から4月20日まで、“日本植物分類学の父「牧野富太郎」”と題する企画展示(以下「牧野富太郎」展、という。)を開催しました。

この展示は、千葉県立中央博物館(以下中央博物館)で開催された令和4年度春の展示「ちばの植物 探・検・隊！」(令和5年3月11日(土)～5月28日(日))との連携事業の取組の一環として企画されました。中央博物館の展示では、植物の調査に必要な装備や道具の展示とともに、牧野富太郎氏が紹介されていました。

この連携事業では、中央図書館も、講演会「日本の植物分類学の父 牧野富太郎」(令和5年2月25日)を開催しました。講演会場となった中央博物館の講堂内に県内3つの県立図書館から集めた牧野富太郎関連蔵書の展示コーナー(写真1)を設置したところ大変好評で、参加者の関心の高さが窺えました。当日は当館で展示中の資料も搬入し、そのうち、講演会の講師田中純子氏(練馬区立牧野記念庭園学芸員)らにより編集された著作『牧野万葉植物図鑑』²⁾は特に注目を集めていました。

②西部図書館の「牧野富太郎」展の概要

当館での展示は、利用者が入館してすぐ目に留まる位置に設置しました(写真2)。入退館の動線上にスペースを作ったことで、多数の利用者が足を留め、精細な植物画に見入っていました。テレビドラマの影響も相乗し、資料の動きが活発で多くの資料が貸し出されたので、随時追加資料を補充しました。また、展示替えを行い、年度をまたいで期間を延長して開催しました。



写真2 「牧野富太郎」展の様子

③「牧野富太郎」展の展示資料の構成

展示資料は、1、「人間 牧野富太郎」：牧野富太郎の人物像を追った資料群、2、「牧野富太郎の著作」：牧野富太郎が著した随筆等の資料群、3、「牧野植物図鑑」：牧野富太郎が著した図鑑や図集の資料群で構成しました。

展示資料の一覧は、千葉県立図書館のホームページから、「図書館資料の検索」→「図書・雑誌・視聴覚資料の検索」→「いろいろ検索」→「テーマ資料」→「展示で紹介した本(西部図書館)」→「牧野富太郎(2023年1月)」を参照ください。

また、展示中に配布したブックリスト(展示資料一覧)も公開しています。「西部図書館からのお知らせ」→「展示」→「西部図書館 展示「牧野富太郎」のお知らせ」よりご覧ください。

展示期間終了後に受け入れた、牧野富太郎関連の資料はブックリストに加えておりませんが、「新着図書」として随時紹介しています。

3) 千葉県立図書館所蔵の牧野富太郎関係資料

「牧野富太郎」展の展示資料のうち、当館所蔵の出版年の一番古い書籍は、『日本植物図鑑』(牧野富太郎著 北隆館 1925)でした。古いとはいえども、現役の蔵書として利用提供を行っています。

また、この度の展示には取り上げませんでしたが、中央図書館では、1900年代初頭から中盤(1960年代)頃までに刊行された牧野富太郎氏の著作等も所蔵しています。これらの資料も、千

千葉県立図書館ホームページから蔵書検索が可能で、千葉県立図書館内で実際の資料を閲覧できます。なかには、牧野富太郎氏による標本鑑定の「千葉県植物目録」(『史蹟名勝天然記念物調査』第9輯 千葉県 1932)もあります。

4. サイエンス・カフェ

1) サイエンス・カフェとは

サイエンス・カフェとは、「科学技術の分野で従来から行われている講演会、シンポジウムとは異なり、科学の専門家と一般の人々が、カフェなどの比較的小規模な場所でコーヒーを飲みながら、科学について気軽に語り合う場をつくらうという試み」³⁾です。当館では、一般向け講座「サイエンス・カフェ」を、自然科学に関するテーマについて、講師と県民が気軽に語り合う場を設ける⁴⁾ことにより、自然科学に対する興味を喚起し、今後の図書館等の利用促進を図ることを目的として、平成22(2010)年度より継続して開催してきました。

この年(平成22年)は国民読書年であったことから、当館のサイエンス・カフェは国民読書年の機運を高める催し物の一つとして開催し好評を得たため、次年度以降も博物館等との連携事業として継続開催しています。毎年、中央博物館や千葉県立現代産業科学館等から講師を招き、サイエンス・カフェを開催するとともに、テーマに関連した所蔵資料の展示や、X(旧Twitter)等で、招聘した講師が所属する博物館等の紹介を行っています。これには、図書館・博物館の連携により、相互の利用促進や、知の創造と循環を生み出すねらいもあります。

2) サイエンス・カフェの開催内容

サイエンス・カフェは、今年(令和5年)で講座開催通算18回目を迎えます。なお、平成25(2013)年度～28(2016)年度は、年2回開催しました。表1のとおり、これまで、生き物や地学、環境や科学技術までの幅広いテーマを取り上げています。

表1 サイエンス・カフェの開催一覧

年月日	テーマ・講師
H22 9/21	「第50次南極地域観測越冬隊員として南極で過ごした1年間余について」 武田 康男 氏 (県立東葛飾高等学校教諭 理科地学、気象予報士 第50次南極地域観測越冬隊員、日本気象学会会員 日本自然科学写真協会会員)
H23 9/10	「私たちの暮らしを支えるロボットたち」 岩崎 正彦 氏 (県立現代産業科学館 首席研究員)
H24 7/1	「宇宙へのきぼう」 小池 正樹 氏 (県立現代産業科学館 主任首席研究員)
H25 8/10	「(生き物編) 特別天然記念物ニホンカモシカを追って37年」 落合 啓二 氏 (県立中央博物館 生態・環境研究部長 兼環境教育研究科長)
H25 10/5	「(科学技術編) 飛べ! 大空に ～とばすワザ とぶフシギ～」 長尾 諭 氏 (県立現代産業科学館 主任首席研究員)
H26 8/9	「(生き物編) 房総の海の魚たち ～東京海底谷の珍しい魚～」 宮 正樹 氏 (県立中央博物館 動物学研究科首席研究員 兼動物学研究科長)
H26 10/25	「(科学技術編) 生物のデザインに学ぶ ～未来をひらくバイオミメティクス～」 生井 敏明 氏 (県立現代産業科学館 主任首席研究員)
H27 8/8	「(生き物編) 身近な生きものの名前を調べよう～あなたの知らない図鑑の世界～」 斎木 健一 氏 (県立中央博物館 植物学研究科・主任首席研究員)
H27 10/31	「(科学技術編) 最先端ネットワークのかたち～知ってトクするネットのからくり～」 鈴木 淳一 氏 (県立現代産業科学館 学芸課長)
H28 8/6	「千葉県の恐竜時代～千葉県から恐竜は見つかるかな?」 伊左治 鎮司 氏 (県立中央博物館 企画調整課・主任首席研究員)
H28 10/30	「生物の多様性を考える～遺伝子の多様性って何?～」 後藤 亮 氏 (県立中央博物館 企画調整課 研究員)
H29 7/29	「日本人と海藻」 宮田 昌彦 氏 (県立中央博物館 生態学・環境研究科 主任首席研究員)
H30 10/27	「チバニアンはどうすごいか～地中海北岸(主にギリシャ)と市原市田淵の事例から～」 奥田 昌明 氏 (県立中央博物館 主任首席研究員 千葉県生物多様性センター副主幹 併任)
R 元 10/20	「海鳥目線でまるごと堪能! 一房総の海の魅力～」 平田 和彦 氏 (県立中央博物館 生態学・環境研究科 研究員)

年月日	テーマ・講師
R2 11/7	「過去に学ぶ 日本のインフルエンザ・パンデミック（スペイン風邪）～100年前、日本人はいかに戦ってきたか」 内田 龍哉 氏（県立中央博物館 資料管理研究科 主任 上席研究員）
R3 10/30	「ところ変われば備えも変わる あなたの街と自然災害」 八木 令子 氏（県立中央博物館 生態・環境研究部 上席研究員）
R4 11/12	「江戸時代のバラ」（写真3） 御巫 由紀 氏（県立中央博物館 資料管理課長）
R5 11/12	「よみがえるチバニアン期の古生物」（写真4） 丸山 啓志 氏（県立中央博物館 自然誌・歴史研究部 地学研究科研究員）

3) サイエンス・カフェ実施の意義

サイエンス・カフェで実施した参加者アンケートより感想を一部紹介します。

- ・ 貴重なお話ありがとうございました。新刊本も早速読ませていただきたいと思います。また「サイエンス・カフェ」を開催していただければと願っています。
- ・ 実際に体験された事を本人の説明で聞いた事は、説得力、臨場感があり、本当に感激しました。
- ・ 普通では聞けない貴重な体験談と映像を見せていただき大変よかったです。地球温暖化についても新知識を得ることができました。
- ・ 先生のお話を伺い、ここ30年の技術の進歩を改めて思いました。あと5年先、10年先の私の生活にロボット技術がどれだけ生かされることになるのか楽しみになってきました。
- ・ きょうは有難うございました。現代産業科学館の企画展にも是非行ってみたいと思いました。
- ・ くつろいだ雰囲気勉強でき大変よい。知りたいポイントを説明いただいた。
- ・ 難しい内容でも、身近な問題と結びついているという事を知る事が出来て良かったです。
- ・ 10年ひと昔で変わっていく世の中に、こ

のような機会に勉強して何とかついていけたらと、思いました。

各年度の参加者アンケートより一部分を抜粋

上記のような感想は、当館のサイエンス・カフェが、その目標とする、

- ・ 気軽に語り合う場を設けること
- ・ 自然科学に対する興味を喚起すること

を参加者に提供できていたことを物語っており、当館のサイエンス・カフェが意義あるものであることを示していると思います。

特に「新刊本も早速読ませていただきたい」「現代産業科学館の企画展にも是非行ってみたい」という感想からは、生涯にわたって学び続けるための意欲付けになっていると考えられます。

今後も、博物館等との連携を続け科学分野の講座を開催していく予定ですが、サイエンス・カフェの目的(原点)を第一に、参加された方々の満足度を上げられるよう努めてまいります。



写真3 令和4年度開催「江戸時代のバラ」の様子



写真4 令和5年度開催「よみがえるチバニアン期の古生物」展示の様子

5. その他の連携状況

1) 資料展示や広報における連携(令和5年度)

明治6(1873)年に木更津県と印旛県が合併して誕生した千葉県は、令和5(2023)年に150周年を迎えました。当館でも記念事業として様々な広報活動を関係機関と連携して実施しました。

・「写真で見るちばのあゆみ」パネル巡回展(中央博物館)

明治6年から現在までの千葉県のあゆみを県立博物館が所蔵する写真などで振り返るパネル展示です。時代やテーマ別に解説されている15枚のパネルを中央博物館からお借りし、来館者の多い夏休み中に約2か月間設置しました。高さ2メートル近い大きくカラフルなパネルは注目を集め、立ち止まって熱心に見入る方、チラシなどの情報からパネル展のために来館する方など、多くの反響がありました。秋からは東部図書館で巡回展が始まっています。

・「伝えたい千葉の産業技術100選」(現代産業科学館)

県内各地には、産業の歩みを物語る様々な技術が数多くあります。これらの技術の顕著な成果や地域との関わりを紹介し次世代に引き継ぐため、現代産業科学館では平成27(2015)年度から地域の産業に関する資料を作成し、HPで公開しています。令和4(2022)年度現在、76件のテーマが選定されています。

当館では、技術・工学分野を重点的に収集しているというメリットを生かし、千葉県における産業技術の歴史を調べるための蔵書紹介を、千葉県150周年を記念して実施することにしました。

実施に当たっては、事前に、当館のサービス管内11市に關係した19件のテーマを選び、概要を説明したパネルを現代産業科学館に製作していただきました。閲覧席エリアの壁面に貼ったパネル周囲には、各テーマの解説を現代産業科学館のHPからダウンロードし、来館者が自由に持ち帰れるよう設置しました(写真5)。「しょうゆ醸造所」、「栗山配水塔」、「小山樋門・柳原水閘」などは人気があり、解説を追加補充しま



写真5 現代産業科学館「伝えたい千葉の産業技術100選」パネル展示

した。

次に、職員研修を兼ねて週末の朝礼時に、各テーマに関する蔵書や情報を発表するレファレンス勉強会を行い、全職員が交代で資料研究を行いました。集めた蔵書はパネル前に展示しSNSでも紹介しました。この活動は年間通して行う予定ですが、今後は調査した情報を整理しHPにも公開できたらと考えています。

・「関東大震災から100年」パネル巡回展(中央博物館)

中央博物館では9月末まで「関東大震災から100年 —災害の記憶を未来に伝える—」と題したトピックス展を実施しました。関東大震災を引き起こした大正関東地震の説明パネルや、被災の様子を伝える震災絵はがき、震災関連の石碑拓本などで構成されています。図書館では、これらの資料をお借りし蔵書やレファレンスツール(時事情報提供サービス「図書館から世界(ニュース)が見える」)などと組み合わせで紹介しました。

2) 千葉県立社会教育施設等の事業連携に関する意見交換会

平成25(2013)年度、中央博物館と県立図書館による意見交換会を開始しました。背景としては、「博物館の設置及び運営上の望ましい基準」(平成23年)や「図書館の設置及び運営上の望ましい基準」(平成24年)の改正があり、県民の学習活動を支援するために、各館が所蔵する資料や人的・知的資源を活用して、実践を踏まえた連携・協力体制を構築することを目的としてい

ます。

その後、平成27(2015)年度にはさわやかちば県民プラザ、平成29(2017)年度には千葉県文書館(以下文書館)も加わり、現在も継続して各施設の事業について情報交換する場を設けています。

当館の「サイエンス・カフェ」の他にも、東部図書館の「歴史講座」等(文書館・中央博物館等からの講師派遣)、さわやかちば県民プラザの「教職員のための読み聞かせ講座」(中央図書館からの講師派遣)、また、中央博物館の企画展示での、中央図書館職員による「恐竜」や「哺乳類」をテーマにした絵本の読み聞かせなど、様々な取り組みをしてきました。これらの事業も意見交換会で顔を合わせて打ち合わせることで、よりきめ細かな連携協力が実現しています。

3) 千葉県博図公連携事業(平成26年度～令和元年度)

県内の博物館・図書館・公民館が連携して、県民によりよい「学びの場」を提供するため、情報の収集・共有と発信を目的に様々なテーマに沿って事業を行ってきました。中央博物館が文化庁文化芸術振興費の補助を受け平成26(2014)年度から実施した事業で、実行委員長を中央博物館長とし、事務局は中央博物館が務めました。⁵⁾

「もののけ」や「不思議な話」などの口承文芸や世間話、「きのこ、菌類」、「交通」、「海のくらしとまつり」、「縄文文化」などをテーマとして事業を展開し、その活動を通して社会教育施設のネットワークについて検証を進めました。

各テーマについては、展覧会、巡回パネル展示、地域の方と絵本づくり、県民からの情報募集など、各社会教育施設の特徴を生かした取り組みを行いました。

また、各施設の職員による連携研究を実施し、平成28(2016)年度には社会教育の専門家である和歌山大学名誉教授の山本健慈先生を招き、和歌山大学での取り組みについて講演を伺うとともに、若手職員によるクロストークを行いました。翌年度は、元国立市公民館長の荒井敏行先

生からMLK連携を学び、グループ討議では地域の課題解決や社会教育施設の役割について協議を深めました。

平成30(2018)年度⁶⁾には、利用者と博物館・図書館・公民館をつなぐツールである「本」を切り口に、「博物館における図鑑の展示」、「公民館の図書に関する活動」、「図書館における図書の展示」について、それぞれの立場から事例発表し、その成果を基にシンポジウム「本」をめぐる博図公連携を開催、日比谷図書文化館、東洋文庫ミュージアム、国立科学博物館から講師を招き、連携のありかたや可能性、新しい利用者層の開拓などについて考えました。

4) 連携事業を振り返って

田窪氏は前掲書で、連携のレベルは連続して進展するというギュンター・ワイベルらの「連携連続体」¹⁾という概念を紹介しています。これには、「接触」「協力」「協調」「共同」「収斂」のレベルがあるので、千葉県の場合で考えてみます。

「接触」は、意見交換会の場が相当し、翌年度の事業予定などを共有しています。「協力」には、互いの事業に必要な資料提供やレファレンス等の相互協力が考えられます。次に個々の連携事業での必要に応じた講師派遣や展示等の「協調」するレベルがあります。

各館がもっている主催事業について、その都度テーマに関連のありそうな部分で連携していく、というゆるやかなつながりですが、日常的に「接触」「協力」「協調」を繰り返すことによって、互いの利用者層を拡大でき、図書館にとっては、特定テーマの展示や講演会を行うことで蔵書の充実を図るなど、中核となるサービスの向上につながっています。なお、前述の「図書館の設置及び運営上の望ましい基準」(平成24年)の改正により、図書館の運営状況を積極的に公表することとなりましたが、連携事業を実績としてカウントし、数値目標を設けたことが、連携事業継続に効果があったと考えます。

博物館・美術館(Museum)、図書館(Library)、文書館(Archives)の連携(MLA連携)には、プロジェクトの共同作成やデジタル資源の創造、施設の共同利用などの事例報告があります。⁷⁾

本県の意見交換会は特に事務局を設けての共同事業を行っているわけではありません。しかし、継続して実施する中で、所蔵資料のメタデータの持ち方など、議論が専門的な内容に及ぶこともあります。引き続き関わった職員が互いに学びあいながら、MLA連携を発展させていければと考えます。

6. おわりに 複合施設化に向けて

令和11(2029)年度、県立図書館3館は体制を見直し、新しい県立図書館1館に資料と人的資産を集約する予定です。千葉県文書館との複合施設として、図書館・文書館・博物館連携をはじめとする相互連携による機能強化とサービス向上を目指しています。計画敷地である公園には中央博物館や芸術文化ホールがあり、これまで以上の連携を進められることと思います。新たな知の拠点では、県民が、様々な文化情報資源を活用して調査研究活動を行い、その成果を発表することで新たな資源を生み出す「知の創造と循環」ができる施設を目指します。各施設がさらに連携を深め県民の学びを支えられるよう、今後も協力して取り組んでいきたいと思えます。

本稿を記すにあたり、千葉県立中央博物館生態・環境研究部長 島立理子氏、千葉県議会事務局図書課図書班長 山田浩子氏に有益なご助言を頂きました。この場を借りて深く御礼申し上げます。

注・参考文献

- 1) 田窪直規「博物館・図書館・文書館の連携、いわゆるMLA連携について」(『図書館・博物館・文書館の連携 シリーズ・図書館情報学のフロンティア No.10』日本図書館情報学会研究委員会編 勉誠出版 2010)
- 2) 『牧野万葉植物図鑑』(牧野富太郎原著 邑田仁、田中純子他編集 北隆館 2022)
- 3) サイエンス・カフェ／日本学術会議 <https://www.scj.go.jp/ja/event/cafe.html>
- 4) 西部図書館では飲み物の提供はしておらず、ご持参いただくか自動販売機でご購入いただいています。
- 5) 千葉県博図公連携事業実行委員会

<http://www2.chiba-muse.or.jp/www/NATURAL/contents/1541843511495/index.html>

- 6) 『博物館・図書館・公民館が手をつないだら、なにができるだろう。千葉県博図公連携事業事業報告書』(千葉県博図公連携事業実行委員会2017) 報告書は2018、2019年版もあり
- 7) 『公立図書館・文書館・博物館 協同と協力の動向』(アレクサンドラ・ヤロウほか著 京都大学図書館情報学研究会 2008)

農村からの生産・生活情報を発信する『ルーラル電子図書館』**

"Rural Digital Library" disseminating production and lifestyle information from rural areas

小林 誠*

1. はじめに

『ルーラル電子図書館』の事業は1996年4月に始まりました。それ以来、有料・会員制のサイトとして、インターネットの普及と共にユーザーを増やしてきましたが、発足当初とは情報インフラをはじめとする利用環境が様変わりし、コンテンツの種類や形式など、さまざまな変遷を重ねています。

「電子出版」という言葉の輪郭がほぼ誰の眼にも明らかになった昨今ですが、出版者が自ら「図書館」を名乗ってその作品を公開するというビジネスは珍しい部類に入るといえましよう。また、当時はまだ「電子図書館」という言葉もまだ一般的ではなかったはずで、かなり思い切った事業であることは間違いないと思います。農業とデジタルという組み合わせも意外性があったかもしれません(『ルーラル電子図書館』という名称は、商標として登録されています)。

このたびの日本農学図書館協議会からのご依頼は「運営上の苦労話を」とのことでしたが、多分に「出版界の珍獣」観察の趣があるのではないかと推察し、ここでは専門的な分野の一版元として、この間どのような考え方でこの事業を発展させてきたのかをご紹介します、ご批判を仰ぎたいと思います。

2. 発足時のスローガンは「パソコンを農具に」

1) 「電子出版」黎明期の模索

1987年に『広辞苑・CD-ROM版』が発売され



図1 『ルーラル電子図書館』現在のトップページ(下部を割愛)

て以来、パソコンの急速な普及とともに数多くの電子出版作品が登場しました。それは当時の出版物製作がデジタルデータの活用を前提とす

*一般社団法人農山漁村文化協会(農文協) 埼玉県戸田市上戸田2-2-2
Makoto KOBAYASHI, Ippannsyadanhoujin Nosan-Gyoson-Bunkakyokai (No-Bun-Kyo), Rural Culture Association Japan,
2-2-2, Kamitoda, Toda-city, Saitama, Japan

る段階に至ったことを示していますが、私共農文協にもその波は着実に押し寄せていました。

たとえば『日本の食生活全集』や『農業総覧 病虫害防除・資材編』(加除式出版物)といった大型作品は、データベース的な構造を持ったものとして企画され、後々どうなるかは見通せないものの、何らか電子化への布石を打つような作業を手探りながら始めていました。また、頻繁に新製品が登場し、適用作物や病虫害等に変更が生じる農薬の本は、新版発行の度に一定部数は売れるものの、どこかでCD化すべきものとして準備も進めていました。このように「検索して使う・引く本」「更新が頻繁な情報を扱う本」は、紙では限界があり、いずれはデジタル化されるべきものという観念はこの当時から明瞭に意識されておりました。

日本電子出版協会(JEPA)には、1986年の発足当初から加入して同業他社と情報を交換し、全国の農家や現場指導者らが集う「農業情報利用研究会」(現在の農業情報学会の前身:1989年発足)にも参加し、現場でのパソコンやネット活用についての実態を見聞するなど、この頃は模索の時代でした。大手出版社のようなCD-ROMにはまだ手を出せないが、現場には意外とパソコンを使いこなす(たいと考え)ている農家は確実に増えているという実感は得ていました。

2) 読者からの声「雑誌をPCで...」

そうこうしているうちに、たまたま同時期に複数の読者から「雑誌『現代農業』の目次をパソコンで検索できないか」という要望が寄せられました。「今どきの雑誌はコンピュータで作っているはずだからすぐにできるだろ」というのです。それまでは農文協の電子出版は「引く本」から始まるだろうという思い込みが、ここで一気に「まずは雑誌からか?」という話に変わっていきました。

農文協の出版活動の柱のひとつは月刊誌『現代農業』です。農家向けの生産・生活技術を扱っていますが、最大の特徴は「農家の技術」がメインであることです。執筆者や取材対象はそのほとんどが農家であり、学者・専門家が登場しても「農家がどうしているのか」を踏まえたものになっています。全国の農村を回って雑誌を

売りながら、読者の欲求を探って企画に反映させるという活動が農文協の伝統ですが、そうしてできた誌面には、農家ならではの見方・考え方が反映され、単なる理論ではなく実践に役立つ情報が蓄積されているといえましょう。

長年じっくりと付き合ってくれる読者の多くは古い雑誌を捨てません。農業の記事は古い記事でも十分役に立つからです。この要望はそこをなんとかせよと言っています。当時世の中ではパソコンが流行し、農村も例外ではありません。「目次をパソコンで...」という声は突飛なものではありません。

さっそく目次のテキストをパソコンで読めるようにしてみました。毎年12月号にはその年の「総目次」を掲載しますが、それをパソコンに入れてみたらどうなるか。毎号100件ほどの記事が集まればそれなりの分量にはなるものの、どうも物足りません。目次に出てくる記事のタイトルだけでは、検索対象としては不十分です。当時念頭においていた約10年分の雑誌のほとんどは「活版印刷」で作られており、全文テキストはデータになっていなかったのです。

そこで、各記事の取材対象・執筆者名、地域名、見出し、図表写真のキャプションまでをデータ化してみました。すると、これが記事の重要なキーワードを抽出したかのように、検索の幅が飛躍的に広がりました。ひとつのキーワードで、関連する記事がまとめて取り出せる。連載はもとより、同じ農家がいろいろなテーマで登場したり、ある技術をめぐる追求の経過が辿れたり、まったく違う記事の中に意外な共通性が垣間見えたりもする。見出しやキャプションのつけ方に編集者が工夫をこらしていることに改めて気づかされたりもしたものです。

このように、農文協の電子出版はデータベース的な作品から着手しようと模索していたことが、ここでひとつの転換点を迎えました。雑誌という記事の集合体が、検索によって広がりや深みを伴った新たな集合体としてとらえなおせるのではないかという可能性が見えてきたのです。そこでまず製品化したのが『現代農業』の『記事検索CD-ROM』でした。発売は「電子図書館」開設とほぼ同じですが、その後CD-ROM作品は雑誌以外のタイトルも合わせて、

2011年まで農文協の電子出版を牽引していくこととなります。

3) 農家・農村での「デジタル化」に着目

農業は作物や家畜、つまりは自然が相手の仕事です。いつでもどこでも同じ条件での生産はあり得ません。農家も経営はいろいろ。年齢、性別、体力、家族構成、そして何より経営者の思い・考え方や経験が千差万別です。全国一律の普遍的な技術・対策というものは無いのです。そして技術は生産のみならず、暮らしの中にも存在します。技術は常に農家の個性とともにあり、必要とされる情報はとても多様となります。そうした要請に応える、農家の発想で書かれた記事を見つけるには「検索」が決定的です。

また現代の農業は、品種、肥料、農薬、機械など、さまざまな資材活用の上に成り立っており、それらを的確に使いこなしていかななくてはなりません。さらに「安全・安心」「環境保全型」「持続可能性」についての情報も行き交う今、農家は常に情報に対する感度を研ぎ澄ませる必要があります。農業は他産業に劣らず、情報に対する姿勢(=アンテナ)が経営を大きく左右するのです。

一方、最新情報とともに、過去の情報が貴重であるというのも農業の特徴です。先にも述べましたが、何年に一度という異常気象や災害に関しての記事はもとより、作物や家畜の本性のようなものは、数年で変わるようなものではありません。古い品種の復活や伝統農法の見直しも盛んなように、過去の蓄積に学ぶ姿勢も重要です。

このように、検索、アンテナ、蓄積とくれば、今日的にはデジタルの出番。前述のようにパソコンの普及が進み、農家は簿記などの経営管理に使い出し、パソコン通信が産直や情報交換にも有効とみられてきた時代です。農文協は「農家・農村こそ情報化が求められている」として、電子出版に取り組むことにしました。折からWindows95の発売でインターネット普及に拍車がかかる時です。CD-ROMと同時にネットによる発信もスタートさせたのです。

農業でのコンピュータ活用といえば「植物工場」や、ロボット利用をイメージする向きもあ

るかもしれませんが、私たちはそうではなく「農家が自ら情報を編集するツール」と位置づけました。ここでいう「編集」とは、集め・取捨選択し・使いやすいように組み替えることを指しますが、パソコンはそのために有効な「農具」となるのです。

3. 「検索」の変遷

1) 全文検索へ

前項で述べたように『ルーラル電子図書館』の発足当初の検索は全文検索ではありませんでした。そこまでしなくともなんとか目的の記事はヒットしそうだという感触を得ていましたが、実情は全文検索をしたくてもハードルが高かったのです。雑誌のみならず、収録している作品はその時点ではまだ活版で印刷されていたものが多く、全文検索をするには、改めてテキストデータを持たなくてはなりません。それでもやはり本命は全文検索だという思いは強く、CD-ROMや電子図書館が始まった時点では製作行程のデジタル化は進んでいたこともあり、その後の展開を考えれば、活版分も遡ってデジタル化することが必要であると判断しました。このときは多くの外部スタッフが大車輪で入力作業にあたり、その費用は桁違いのものとなりました。支払い事務作業時にはじんわりと汗がにじんだ感覚を今でも思い出します。

こうして検索結果の幅が広がり、多くの記事を縦横に調べられる感覚が得られるようになりました。同時に「意外な記事」を発見する可能性も高まります。営業では「膨大な数の記事から目的の情報を即座に引き出す」ことがデータベース活用の醍醐味であることを力説しました。ヒット件数を示して「これだけの記事が見つかりました」と、いかに多くの情報が詰まっているかを示すことは、デモでは最初のアピールポイントでした。

収録した作品は『現代農業』だけでなく、『農業技術大系』『農業総覧』といった加除式出版物、『日本の食生活全集』のような大型企画へと広がり、「食と農の総合データベース」としての体裁を整えていきました。その後コンテンツは年々増加し、現時点での収録作品は表1のとおりとなっています。

月刊『現代農業』	農家や農業関連業界ではすっかりおなじみの月刊誌『現代農業』。1985年1月号からの全記事（最新号は発売後2ヶ月以内に公開）を収録しています。全国各地の農家の知恵とそれを裏付ける研究成果がわかりやすい記事になっています。
『季刊地域』	農家、農村、農協、行政、NPO、企業、そして地域に向かう市民を「共感」のもとに結び直す雑誌です。「地域資源」「地エネ（地域・地元のエネルギー）」「農・農家」「農村の自給力」「農村の自治力」をテーマにお届けしています。
『農業技術大系』	農業技術の百科事典として定評がある農学研究成果と全国先進農家事例の集大成。土壌施肥編、野菜編、作物編、果樹編、花卉編、畜産編の6シリーズすべての記事を収めています。各編とも毎年1回最新情報を追加。
『病害虫防除総覧』	130作物、1500病害虫の診断法と防除法を詳述。安全・安心の生産確立に向けて、的確に農業を効かせる技術はもとより、農業に頼らない防除法にも重点を置いています。
『日本の食生活全集』	全国300地域、5000人のお年寄りから取材した、地域に根ざした食事の記録。昭和初期の日本の食と暮らしを再現したデータベースになっています。52000種類の料理、15000枚のカラー画像を収録。
『伝え継ぐ 日本の家庭料理』	日本各地で昭和35～45年の食生活を聞き書きして選ばれた料理、家庭でつくれるレシピ1400品を収録した全16巻の全集（2021年12月に完結）。キャッチフレーズは「100年後にも伝えたいふるさとの味」。
『日本農書全集』	持続的農業と循環型社会の原像＝江戸期庶民の生活世界を記した農書を全国から300点余を発掘しました。郷土の貴重な文化遺産が正確な原文と流麗な現代語訳で読めます。研究者による解題も加わっています。
『食品加工総覧』	各地の試験研究機関や食品企業で進む素材開発や新商品開発、安全・安心で経費のかからない加工技術の研究、さまざまな加工販売事例…。このような食品加工をめぐる動きをとらえた食品づくり百科事典として貴重な資料です。毎年1回最新情報を追加。
『食農教育』など教育関連作品	雑誌『食農教育』『農業教育』などに掲載された食・農に関する教育実践と、「あそび事典」「こだわり食品」などの単行本シリーズに掲載された遊び、実験・観察、調理・加工の記事を収録しています。
農業入門関連作品	野菜づくりの入門書として『新野菜づくりの実際』（全5冊）と、農業高校教科書と同じ内容の『農学基礎セミナー』（全11冊）を収めています。
ビデオ	イネ、野菜、土づくり、防除など農作業のポイントをわかりやすく解説するビデオを中心に、農業技術・経営、健康・食生活、地域づくり、環境等をテーマにしたビデオも視聴できます。

表1 2023年9月現在の収録コンテンツ一覧



図2 『現代農業』 検索結果の表示例(下部を割愛)

2) 用語集・用語事典の併用

全文検索は『ルーラル電子図書館』にとって、最も重要な柱であることは間違いありませんが、ある程度の年月を経たところで、「それだけでいいのか?」という課題が提起されました。

ひとつのエピソードをご紹介します。私はあるときユーザーである大学図書館で、農学系の新入生を対象にしたガイダンスの講師を務めました。電子図書館についての説明をひととおり済ませ、検索を試してもらったところ、質疑応答の中で「トマトについて知りたいと思ったのですが、どうしたらいいですか?」という質問が出ました。内心やはりそう来たか、と思いました。収録作品を読んだことがない学生にとっては、ごくあたりまえの疑問かもしれませんが。実は『ルーラル電子図書館』はそういう調べ方はあまり得意ではありません。なぜなら、用語そのものの解説をする事典的な作品は収録されていないからです。私の答えは「このシステムの特徴(弱点?)です。いい質問でした」と



図3 『農業技術事典』のトップページ(下部を割愛)

切り抜けましたが、当の学生さんの顔は納得にはほど遠いものだったことは忘れられません。

このような課題については、インターネットで検索すればいくらでも情報は得られるかもしれませんが、「総合データベース」としてはなんとかしなければならぬ課題です。これは今後の課題でもあるのですが、2012年に『農業技術事典』を格納して農業技術に関する用語解説はかなりカバーできるようになりました。

適切な検索語を使えるかどうかという問題もあります。検索語をいろいろ試しているが、思うような結果が得られないという話はよく聞きます。システム側では同義語や表記の揺れを含んだ辞書を準備してはいるのですが、それには限界があります。また、これはという検索語が思いつかないということもよくあります。そこでキーワードになる用語のリストを作成し、そ

れをクリックすれば検索結果が出るページも設けました。万全とはいええないものの、そのリストを見ているうちに、検索語を思いつくことも期待しましたが、この問題は「検索」にはつきものの課題ともいえましょう。この点については、後でも触れたいと思います。

3) 「索引」の見直しへ

紙の本では「索引」がついているものがありますが、発足当初、収録記事にキーワードを付与し、索引的な機能を持たせようとしたことがあります。しかし、この作業はなかなか難しかったことがわかりました。編集者からもクレームが寄せられ、これは断念せざるを得ませんでした。それ以降、索引は設けず、前述の「タイトル・見出し・キャプション…」といったものを「キーワードなど」に対する検索として、全文検索と区別しています。

ところが、2022年から収録している『伝え継ぐ日本の家庭料理』では、「料理索引」「材料索引」を加えるべく、現在作業を進めています。この作品は家庭料理のレシピを集めたものですが、数多くの料理を探すには索引が必要だろうということになりました。作業を進めながら、他の作品にも索引が必要な場面はいろいろありそうなことに改めて気づかされました。

前述の「キーワードなど」には、索引語的なワードが含まれていることは多いのですが、そうでないこともまた多く、そこは一定の基準の元に生成された索引があった方がよかろうというケースがあります。たとえば作物名。まず「トマトの記事」(この特定も実は難しい面があるのですが)と作物を限定したいような場合です。あるいは「農家の実例」だけを探したい時。発足当初は「ヒットした記事の数」を誇ったりもしたのですが、ネット検索でも上位しか眼に入らなくなった今、よりの確な検索結果を得るにはどうしたらいいのか、これはいつになっても重要課題として残っています。

4. コンテンツの多様化

1) 二次利用からアプリ的コンテンツへ

いうまでもなく『ルール電子図書館』のコンテンツの大部分は紙の出版物の二次利用で



図4 『日本の家庭料理』のトップページ(下部を割愛)

す。発足当初はそれしかありませんでした。しかし、2006年から農協の営農指導と購買事業(農薬をはじめとする資材販売事業)支援を目的としたパッケージ「JA版農業電子図書館」に取り組んだことをきっかけに、「登録農薬検索コーナー」を開発しました。病虫害診断の作品と結びつけて、防除のための農薬が即座に引けるようにしたものです。農薬は新薬の登場だけでなく、作物や病虫害への適用や使用法などの「登録内容」が頻繁に更新されるため、それをリアルタイムで入手し、常に最新情報を提供しようというものです。

それは出版物云々を超えた、ひとつの農薬ソフト。今でいう「アプリ」開発です。導入先の農協で取り扱っている商品には「JAマーク」を付けるなどの機能も加えました。これが現場で評価され、今では全国の農協の過半数がユーザーになるひとつの大きなきっかけとなりました。



図5 「登録農薬検索コーナー」のトップページ

その後、農薬ほどの規模ではないものの、紙の作品にないコンテンツがいくつも格納されるようになりました。二次利用だけではない、真に現場で役立つツールが求められたことへの対応です。この辺は「電子図書館」という字面をかなりはみ出す、農文協ならではの振る舞いといえると思います。

2) 動画への展開

紙を超えるコンテンツは何といっても動画です。YouTubeが今ほど流行っていない頃、きっかけは雑誌編集部に寄せられた農家からの動画だったと思います。取材であれこれ聞かれてもなかなかうまく伝わらないからこれを見てくれ、と送られた動画には、取り上げたい作業の一部始終が収められていました。文字どおり百聞は一見にしかず。動画の情報伝達力を思い知りました。

機材が簡単使えるようになってから、雑誌の取材時に動画も撮ってくるケースが増え、「取材ビデオ」として公開するようになり、元々販売していた動画作品(DVDやVHS)も合わせ、その数は現在約1400本となっています。

この他にまだ公開はしていないものの、記事テキストを音声合成ソフトで読み上げて、農作業中でも聞けるようにすべく、ソフトハウスと打合せを重ねたこともあります。「オーディオブック」が注目されつつある中で、改めて課題となる可能性もあるのではないかと思います。

5. これからの課題

1) スマホへの最適化を加速

ここからは今後の課題整理のようなこととなります。

現在『ルーラル電子図書館』を閲覧している端末は、大まかにはスマホがパソコンを少し上回っているといった状況です。これは世の中の情報活用の実態からすれば、まだPCに偏っているのではないかという気がします。それは、「スマホではまだ使いにくい(=読みにくい)」コンテンツがかなり残っているためと思われます。作品のほとんどが図表写真を多用したりフロー表示に適さないということがありますが、正直なところスマホ対応は遅れています。長年かけて性格の違うコンテンツを次々と投入して行く中で、古いものを新しいデバイスに対応させることがつい後手に回っていることも否定できません。しかし利用の現場はガラッと様変わりしています。

表示形式だけでなく、スマホに最適化した全体の画面設計も改善していかなくてはなりません。こうなるとサイト全体をアプリ開発として再構築していくような、全面改築的な手法が必要かもしれません。

2) 電子書籍時代へどうしていくか

農文協もここ数年の間に、電子書籍の発行を本格化させています。新刊書は原則としてすべて電子化することにしてありますし、雑誌も『現代農業』を含め現在3誌が電子化されています。そうした中で、ユーザーからよくある声として「電子書籍のようにパラパラめくりで読みたい」というものがあります。電子書籍が普及している今となつては当然の要望でしょう。

『ルーラル電子図書館』でも、先に挙げた『日本の家庭料理』では、電子書籍的な表示ができるようになっていますが、それ以前のコンテンツの表示はまだ記事単位のままです。発足時からの歴史的経過で、少しずつ記事の見せ方を変えてきたこともあって、たとえば『現代農業』では「テキスト」「PDF」「ページ画像」の3通りの見せ方があります。これは他の作品も共通ではなく、それぞれ違ったパターンで見せている関係もあって、電子書籍的な表示をすることは

技術的には問題がないことはわかっているものの、統一にはまだに踏み切れないでいます。古い温泉旅館が、近代化をする中で、少しずつモダンなホテルとして増築を重ねて来たようなものともいえます。しかし、このことを放置しては、電子書籍がさらに普及したときにどう受けとめられるのかを考えると、そろそろタイムリミットが近いのかもしれない。

また、電子書籍化された作品と、電子図書館に収録されている作品との関係性をどう考えるのか。究極的には全ての作品を電子図書館に収めるべきなのか。そうなった時に、外部の電子図書館システムとどう棲み分けるのか。これまででは、収録する作品は雑誌や加除式出版物と大形全集企画(すべてではありませんが)という線引きはしてきましたし、それは当面維持されることにはなっていますが、このように将来的にどうなるのかを考えると、課題はつきません。

3) 紙とデジタルの連携へ

これまででは、紙は紙、電子図書館は電子図書館という考え方でもなんとかやれてきたともいえますが、これからはどうでしょうか。出版界全体としても厳しい時代に入っていると言われる中、版元としてどうしていくのかは、紙とデジタルをどう連携させるのかにかかっているように思われます。電子出版をこれだけやってきて、経営の柱となるまで育ててきたからには、この「連携」こそが重要です。それは大手出版社のようなエンタメ分野のメディアミックスとは違った形で、発足当初に掲げた「農の世界でデジタルを生かす」という方針を貫徹するための構想が求められるでしょう。

4) 生成AI時代の電子図書館とは

本稿では検索について述べましたが、最近話題となっている生成AIのデモンストレーションを見聞きしたときに、私達のコンテンツにはどんな可能性があるのかを考えざるを得ません。前述した検索語の選択や表記の揺れなどは気にせず、知りたいことを文章にして投入すれば、最適な記事を(あるいは複数の記事を再編集して)提示してくれることなどは、素材さえ提供すればすぐにでもやってくれそうです。

そうならば、電子図書館は画面遷移や検索システムに工夫をこらすまでもなく、作品をただ格納しておけばすむのでしょうか。著作権のハードルがあるので、そう簡単にはいかないはずですが、これは分野を問わず、あらゆる版元にとって自分事として考えなくてはならない問題です。

今のところ巨大資本にしか手が出せない技術なのかもしれませんが、農の世界で生成AIが活躍するようになれば、弱小専門版元はどう太刀打ちできるのかどうか。あつという間にやられてしまうのか、それとも我々にもその技術を使えるようになるのかどうか。いずれにしても今は実態をよく見て、じっくり考える時だと思います。

7. おわりに

この仕事の立ち上げから関わってきた老兵の一人として、近頃思い浮かべたあれこれを「検索」をメインに述べてみました。

農文協はどうしてこのような特殊な事業を立ち上げ、継続できたのかと何度か尋ねられたことがあります。大まかに言えば、農文協が、1) デジタル化に相応しい出版をしてきたこと。2) 全国の農村を回りこのような商品を届ける地方組織を持っていること。そして、3) ユーザーである農家(と農村)が待っていたこと。これに尽きるのかと思っています。

とはいえ、まだまだその存在は知られていないようです。記事を読むにはID認証が必要ですが、検索結果や目次を見るだけならば認証は要りません。『農業用語事典』は無料で公開しています。まだご覧になっていない方はぜひお立ち寄りください。

最後になって農文協の特殊性に言及しましたが、「珍獣ではあっても絶滅危惧種に非ず」ということで、これからもより多くのユーザーにご利用いただき、この分野に関わる皆様にとってはお馴染みと言われるような事業に発展させるべく、努力を重ねているところです。

** 『ルーラル電子図書館』 農文協(コンテンツ企画・制作)とアシストシステムズ株式会社(システム開発・サーバ管理)が共同で運営して

いる事業です。

URL <https://lib.ruralnet.or.jp/>

ロッテルダムで開催された 国際図書館連盟(IFLA)年次大会2023に参加して

A Series on the Current Trend of Overseas Libraries: The 30th part of the series
Participating to the 88th World Library and Information Congress 2023 hosted by the
International Federation of Library Associations and Institutions (IFLA) in Rotterdam

長塚 隆*

オランダのロッテルダムで8月21日(月)から25日の会期で開催された国際図書館連盟(IFLA)のWorld Library and Information Congress(WLIC)年次大会2023¹⁾に参加する機会を得たので、本年のIFLA WLIC 2023年次大会での議論の内容や大会の様子などを紹介したい。

IFLAの年次大会は、2019年8月にギリシャのアテネで開催された後に、コロナ感染拡大により、2020年は中止、2021年はオンライン開催、2022年はアイルランドのダブリンで現地開催となったが、中国など参加できない国も多く約2000名の参加であった²⁾。本年のロッテルダムで開催された年次大会には、100カ国以上から3000名を超える参加者があった³⁾。

IFLAは、世界の150カ国近くの国立図書館、公立図書館、大学図書館、専門図書館など多様な図書館と、図書館に関する協会や個人で構成される団体である⁴⁾。筆者は2005年から2009年までIFLAの情報技術部会委員、2011年から2019年までアジア&オセアニア地区委員会委員・情報コーディネーター・事務局長を担当した。その後、現在(2023年10月)は地域資料&系図学部会の事務局長を担当している⁵⁾。

国際的な団体では、2019年年末からのコロナ

感染拡大のなかで、国境を越えての移動が制限され、その活動に大きな制約と困難を抱えてきた。その事情は各国の図書館団体と図書館や図書館に関係する個人の国際的な団体であるIFLAにおいても同様であった。本稿では、最近のIFLAの体制や活動を簡単に紹介したうえで、サテライトミーティングや本年のIFLA年次大会について見てゆきたい。

1 IFLAの体制と活動

IFLAの本部は今回の開催地ロッテルダムの近くハーグのオランダ国立図書館内に置かれている。

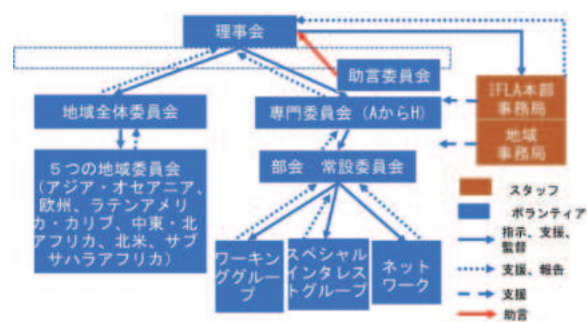


図1 IFLA組織構成の概要

図1のIFLA組織構成の概要⁶⁾から分かるよう

*鶴見大学名誉教授 〒230-8501 神奈川県横浜市鶴見区鶴見 2-1-3 * Takashi NAGATSUKA, Tsurumi 2-1-3, Tsurumi-ku, Yokohama, Japan 230-8501 nagatsuka-t@tsurumi-u.ac.jp

に、IFLAでは専任スタッフで構成されるIFLA本部事務局員や地域事務局員以外は、理事長をはじめ理事や委員会の委員などは世界各国の会員による選挙により選出されている。

選出された理事や委員は一定任期をボランティアとしてそれぞれの役割を担当している。

IFLAの組織の特徴のひとつには、国立図書館、公共図書館、学校図書館、情報技術、学術と研究図書館、健康と生物科学図書館、貴重書と特別資料、法律図書館、図書館建築と設備、地域資料と系図学など40以上の専門部会があり、それぞれの部会ごとに20名の委員が選出され、常設委員会が構成され、様々な活動の中心になっていることである⁷⁾。各部会は年次大会の開催地の近くでサテライトミーティングを主催して開催しており、重要な部会活動のひとつになっている。

また、5つの地域部門(アジア・オセアニア、欧州、ラテンアメリカ・カリブ、中東・北アフリカ、北米、サブサハラアフリカ)では、地域ごとの課題を取り上げてのWebinarの開催や専門部会に協力してサテライトミーティングを開催することなど、地域にベースを置く活動もIFLAとしての大切な活動となっている。

2 サテライトミーティング

本年は、年次大会の前後に各部会が主催して1日から2日間の日程で開催するサテライトミーティングが、合計24ヶ所で地元の公共図書館や大学図書館の協力のもとで開催された⁸⁾。これらのサテライトミーティングは本会議の開催国あるいは近隣の国で開催することになっており、本年はオランダ国内あるいはベルギーで開催された。サテライトミーティングでは、該当の部会の主題に関連する研究発表、ワークショップ、地元の図書館・博物館の見学会などのプログラムが生まれ、開催地の図書館員との交流の場ともなり、重要な部会活動のひとつになっている。

ここでは、筆者が参加したベルギーのルーヴェンでの地域資料と系図学部会によるサテライトミーティングについて詳しく紹介したい⁹⁾。

地域資料と系図学部会によるサテライトミーティングは歴史のある研究大学として著名な

ルーヴェン・カトリック大学図書館(写真1、2)を会場にして、8月17日-18日の2日間の日程で開催された。サテライトミーティングの準備は昨年8月のダブリンでの年次大会の終了後に、ルーマニア在住の委員をサテライトミーティング準備委員長として開始された。その後、数名で準備委員会が構成され、月に一度のZoomでの部会委員会で準備状況を確認しながら進められた。本年2月にIFLA本部の了承を得て、3月末に研究発表の募集を開始した¹⁰⁾。



写真1 ルーヴェン・カトリック大学図書館



写真2 ルーヴェン・カトリック大学図書館の内部

部会の準備委員長とルーヴェン・カトリック大学図書館の担当者とのあいだで、サテライトミーティングをハイブリッド開催するための会場の準備など詳細が検討された。

8月17日-18日に開催されたサテライトミーティングでは、最初に、ルーヴェン・カトリック大学図書館長のヒルデ・ホン・キール教授から「挑戦するルーヴェン・カトリック大学図書

館-その活動とプロジェクト」と題して詳しい紹介があった。

続いて家系図の作成支援などを行っているマイヘリテイジ社のベルギーの担当者であるマリー・カップート氏から「共同して発展を：系図学の領域でより良い役割を果たすために」としてサービスの紹介があり、準備委員長でもあり、欧州のデジタル文化遺産のポータルサイト“Europeana”のマネージャーでもあるクリスチナ・フォア氏からワークショップのパート1「デジタル・ストーリーテリングの紹介」が参加者と共に行われた。

この後、2日間で11件の研究発表が途中で2回のワークショップを挟みながら行われた(写真3)。筆者も日本に於ける「デジタル化された過去の自治体広報誌の公開制限の現状と今後の取り組み(An Openness of Municipal Digital PR Magazines as a Local History Material)」につ



写真3 サテライトミーティングでの研究発表



写真4 ルーヴェン・カトリック大学図書館員による貴重書の紹介

いて報告した¹¹⁾。

研究発表の終了後に、ルーヴェン・カトリック大学図書館の特別コレクションの担当図書館員から詳しい説明があり、その後特別コレクションの見学が行われた(写真4)。最後に、研究発表者には発表証明書が渡された(写真5)。

なお、これらの「地域資料と系図学部会サテライトミーティング」での講演や研究発表などの動画は公開されており自由に閲覧出来るし、発表した研究論文へのリンクも提供されている¹²⁾。



写真5 サテライトミーティングの発表者と参加者

3 ロッテルダムでのIFLA年次大会2023

ロッテルダムで8月21日-25日の5日間にわたり開催されたIFLA年次大会には、100カ国以上から3000名を超える参加者があり³⁾、コロナの感染拡大後、数年ぶりで再会した参加者が多く、会場のあちらこちらで再会を喜ぶ姿が多く見られた(写真6)。年次大会は21日の開会式でスタートしたが、前日20日に各種の委員会などやコーカス(地域・言語別の集会)などが開催され、筆者も早朝から参加した。

21日の開会式は、大きな会場に参加者が入りきれなかったために、会場内の別室にリモート会場が設営された。IFLAの会長からの挨拶の他に、オランダの教育・文化・科学大臣などの政府や自治体の責任者やオランダ王女などからの来賓挨拶があった(写真7)。現在、開会式や年次大会の様子はIFLA YouTubeチャンネル¹³⁾やIFLA Flickr¹⁴⁾で閲覧出来る。

年次大会に併設されている展示会場には図書



写真6 ロッテルダムでの年次大会の会場入口



写真7 年次大会の開会式

館に関連する出版社、データベース提供事業者、デジタル化のための各種機器、図書館設備関連企業など、コロナ禍以前の年次大会ほどではないが、多くの事業者・企業が出展していた。多くの参加者は、展示会場でデジタルコンテンツやデータベースの新たなサービス、デジタルコンテンツ作成のためのスキャナーの新製品、出版社のコーナーなどを熱心に訪れていた。

参加者が来場する展示会場には、2カ所に分散してポスター発表コーナーが同じ広い会場内に設営されており、参加者は、展示会の製品展示を見学すると同時に会員によるポスター発表コーナーで発表者に質問や議論ができるよう、参加者の利便を考慮して設置されていた(写真8)。

4 年次大会での発表内容の特徴

年次大会の発表には基調講演(キーノートス



写真8 ポスター発表会場

ピーチ)、IFLA本部で企画した新規参加者向けの年次大会紹介セッション、各部会がそれぞれのトピックで企画した口頭発表形式のオープンセッション、会員による図書館での活動紹介や研究発表などのポスターセッション(写真8)、事業者による製品紹介のセッションなど参加者の多様な関心に対応できるような内容となっていた。

各部会が企画した対面形式のオープンセッションとポスターセッションについて、その特徴を概観してみたい。

対面形式でのオープンセッションは、専門分野ごとの部会でテーマが決められて、発表者の公募が行われ、部会による発表者の選考後にプログラムが公表され、大会会場で実施される。

本年の大会4日間のあいだに、様々なトピックによる80近いセッションが開催された¹⁵⁾。これらの対面セッションの多くはオンラインでも配信され、オンラインでの参加が可能になっていた。

多くのセッションのなかでも、昨年末にリリースされたChatGPTなどの生成AIを巡って

は複数のセッションが実施され、今後に向けてAIに図書館はどのように向き合っていけば良いのかなど、多くの議論が交わされた。

その議論の中で、図書館はゲーテンベルクからグーグルまで新しい技術を業務に取り入れ、常に社会のニーズに応えるために、その業務内容を進化させてきたし、利用者に信頼できる権威ある情報や知識への公平なアクセスを提供することに努力してきたし、図書館の進化は常に社会の技術的発展と結びついてきたと強調されたことが印象に残っている。大学図書館では、より良い情報の検索と取得、個人に合わせたレコメンデーションなど、生成AIを活用してより効率的なカスタマーサービスを可能にできるのではないかと提起があった。

また、電子書籍のセッションでは、複数の図書館におけるデジタル貸出の現状について、電子書籍の価格の問題など、多くの解決すべき課題があることが指摘され、今後に向けて、公共図書館の電子書籍共同ポータル構築などを含めて、様々な議論が交わされた^{16, 17)}。

筆者は地域資料・系図学部会のオープンセッション「植民地主義と図書館、文書館、博物館 (Colonialism and Libraries, Archives, and Museums)」で研究発表を行った(写真9)^{18, 19)}。



写真9 オープンセッションでの筆者らの発表

今年のポスター発表は、197件が採択されたが²⁰⁾、途中での発表辞退などがあり、実際に会場で展示されたポスターは合計185件で、ポスター発表をした筆頭著者による国数は54カ国であった。

参加国100カ国のうちで、ポスター発表が採択された国は54カ国で、全体の約半数の国からの発表となっていた。ポスター発表数を国別に集計すると米国が18件で最も多く、開催国のオランダが16件、昨年はコロナの感染もあり参加できなかった中国が15件となっており、この3カ国からの発表数が特に多かった。この3カ国以外では、マレーシア、クロアチア、フィンランド、カナダ、台湾、フランス、ドイツ、セルビアからの発表が上位に入っていた(表1)。ちなみに、日本からの発表は3件であった。

ポスター発表の表彰は、従来からの審査員が選出する最優秀IFLAポスター2023と本年から始まった参加者の投票による「ピープルズチョイス2023」のポスター表彰との2つの形式で行われた²¹⁾。

表1 国別ポスター発表数

順位	国名	ポスター数
1	United States	18
2	Netherlands	16
3	China	15
4	Malaysia	11
5	Croatia	9
6	Finland	9
7	Canada	8
8	Taiwan (R.O.C.)	8
9	France	6
10	Germany	6
11	Serbia	6

注) <https://2023.ifla.org/poster-sessions/> の List of accepted Poster Presentations: より作成

5 まとめ

本年8月にロッテルダムで開催されたIFLA年次大会は、2019年にアテネで開催された年次大会以降では初めて100カ国を超える国から3000人以上の図書館員と図書館に関連する研究者や企業などが集まって開催された。昨年8月にダブリンで年次大会が対面で開催されたが参加できない国も多かったことを考えると、コロ

ナの感染拡大後では世界の多くの国からの参加を得た本格的な対面開催での年次大会であったと言える。コロナ前との大きな違いは、対面開催だけではなく、多くのセッションがオンラインでも配信され、オンラインでの参加者も多く、ハイブリッドでの開催となり、今後の国際会議のひとつのあり方を示していたことである。

多数の出席者を得て生成AIやAIの活用に関する複数のセッションが開催され、世界の図書館員が、ChatGPTなどの生成AIやAIの図書館での活用に関心が高いことを示していることが実感できた。その際に心に残ったのは、少し長い時間のスパンで現状を捉えることの大切さであった。

図書館はゲーテンベルグによる印刷術の発明の時代以来、今日のGoogleによる多様な検索や情報提供の時代まで、図書館はその時々の方の技術の進歩に対応して利用者に蓄積した情報や知識を提供し続けてきたことを、永い時間のスパンで捉えて、未来を展望することの大切さであろう。特に、図書館はインターネットの普及後は、ネットワークを経由してより多くの利用者に蓄積した情報や知識を提供できるように、そのサービスの形態を進化させてきたと言える。今回のコロナ禍のなかでのリモートでのサービス提供の継続など、そのことをよく示していると言えよう²²⁾。

今回のIFLA年次大会は、コロナ禍により数年間にわたって世界の多くの国からの参加を得て開催出来なかったこともあり、国ごとに図書館・図書館員の置かれている状況は異なるところも多いが、参加者が一ヶ所に集まることで、その違いや共通点など相互の認識が深まり、今後の図書館の進むべき方向性を検討していく上で有用な機会になったと考えている。

謝辞

掲載の写真は筆者が撮影した物であるが、写真6, 7は原田智子氏よりご提供頂いたものであることを記し、感謝いたします。

参考資料

1) 正式名称は88th World Library and Information Congress 2023 (略称: IFLA

WLIC 2023) in Rotterdam.

<https://2023.ifla.org/>

2) IFLA WLIC 2022: Day one highlights

<https://2022.ifla.org/day-one-summary/>

3) IFLA WLIC 2023: Day one highlights

<https://2023.ifla.org/day-one-highlights/>

4) 国際図書館連盟の会員(IFLA Members)

<https://www.ifla.org/members/>

5) IFLA「地域資料と系図学部会」の委員一

覧<https://www.ifla.org/units/local-history-and-genealogy/committee/>

6) IFLA組織構成の概要(Overview of Governance structure)

<https://www.ifla.org/governance-structure/>

7) IFLA各種委員会の検索(Committee Finder)

<https://www.ifla.org/units/>

8) IFLA WLIC 2023: Satellite Meetings

<https://2023.ifla.org/satellite-meeting/>

9) IFLA Local History and Genealogy Satellite Meeting 2023: Innovative approaches in engaging people with local history and genealogy

<https://www.ifla.org/events/registration-open-ifla-local-history-and-genealogy-satellite-meeting-2023-leuven-belgium/>

10) IFLA WLIC 2023 Call for Papers: Innovative Approaches in Engaging People with Local History and Genealogy (Deadline Extended: 15 May 2023)

<https://www.ifla.org/news/call-for-papers-innovative-approaches-in-engaging-people-with-local-history-and-genealogy/>

11) Takashi Nagatsuka. An Openness of Municipal Digital PR Magazines as a Local History Material. 88th IFLA World Library and Information Congress (WLIC), 2023 Rotterdam; Satellite Meeting: Innovative approaches in engaging people with local history and genealogy

<https://repository.ifla.org/handle/123456789/2796>

12) Recording Available: 2023 Satellite Meeting, Leuven, Belgium

- <https://www.ifla.org/news/recording-available-2023-satellite-meeting-leuven-belgium/>
- 13) IFLA YouTube サイト (IFLA World Library and Information Congress 2023)
<https://www.youtube.com/watch?v=RXQvFpiHvbE&t=6s>
- 14) IFLA Flickr
<https://www.flickr.com/photos/ifla>
- 15) The IFLA 2023 Conference Programme : the iPLANNER.
<https://iflawlic2023.abstractserver.com/program/#/program/3/horizontal>
- 16) WLIC 2023: Day two highlights
<https://2023.ifla.org/day-two-highlights/>
- 17) WLIC 2023: Day three highlights.
<https://2023.ifla.org/day-three-highlights/>
- 18) Organizers: Local History and Genealogy Section
Tuesday, 22 August, 08:30 – 09:45
Colonialism and Libraries, Archives, and Museums
<https://iflawlic2023.abstractserver.com/program/#/details/sessions/213>
- 19) Hasegawa, Yukiyo and Nagatsuka, Takashi.
Preservation and Public Access to the Ex-Colony-related Materials in Cultural Institutions. 88th IFLA World Library and Information Congress (WLIC), 2023 Rotterdam;
<https://repository.ifla.org/handle/123456789/2685>
- 20) WLIC 2023: Poster Sessions
<https://2023.ifla.org/poster-sessions/>
- 21) WLIC 2023: Day four highlights
<https://2023.ifla.org/day-four-highlights/>
- 22) 長塚隆. 新型コロナウイルス感染症の拡大と図書館 -(第 3 編)感染の継続を経験する中で -. 日本農学図書館協議会誌, 202, 1-6, (2021)
<http://jaald.life.coocan.jp/www/wp-content/uploads/2022/07/b7cfdb70d847cade24b2de91524a7875.pdf/>
- (以上すべて 参照2023年10月2日).



「オープンサイエンスにまつわる論点

—変革する学術コミュニケーション—

一般社団法人 情報科学技術協会 監修

南山泰之 編

池内有為, 尾城孝一, 佐藤翔, 林和弘, 林豊 著,

樹村房, 2023年6月

棚橋 佳子*

最新の学術コミュニケーションの動向を知るうえで、オープンサイエンスは重要な概念である。本書は2023年6月に刊行されたが、同年3月に文部科学省が公開した「オープンサイエンス時代における大学図書館の在り方について(審議まとめ)」の文脈でも非常に時宜を得たものである。文科省の資料は、今後の大学図書館のあるべき姿として、オープンサイエンス時代にむけての具体的な方策を提案している。ただオープンサイエンスを説く場合、文科省の資料にあっても、新語や略語が多く、新しい概念が複雑に絡み合い、進展の渦中にあるトピックであるため、全体像をつかむことは難しい。この点を考慮すると、本書は大学図書館や研究所、研究者が直面する課題に対して、オープンサイエンスの幅広いテーマを網羅し、具体的な知識と現状を整理することに役立てられる。

本書は、一般社団法人 情報科学技術協会の会誌の2018年—2019年度の連載記事「オープンサイエンスのいま」をベースに最新動向を加えた形で編纂されている。オープンアクセスとオープンサイエンスとの関係、オープンアクセス自体、研究データの共有、学術コミュニケー

ション、その他重要なテーマに焦点を当てた5章から構成されており、それぞれのテーマに深く切り込んでいる。

本書は、オープンアクセスや研究データ共有が、今ある学術コミュニケーションを大きく変革する中核になるとするが、それぞれ個別の取組ではなく、オープンサイエンスという大きな流れの中でどのように機能しているかを理解できるように導いている。各章ごとに押さえておくべきテーマが順次掘り下げられている。第2章「オープンアクセス」では、「Plan S」の原則と実践、学術雑誌の「転換契約」の概要、論文掲載料(Article Processing Charge : APC)の値上がり問題、妥当なAPCを求める動向、そしてハゲタカOA論文問題について、詳細に解説する。これにより読者はオープンアクセスの現状と課題を深く理解することができる。

第3章「研究データ共有」では研究データ管理(RDM)の目的と現状、データマネジメントプラン(DMP)やFIAR原則について解説し、研究データ共有の際のライセンスやデータの信頼性に関する選択方法などについて触れている。これにより、研究データ共有の適切な実践

*東京農業大学 学術情報課程教授 〒156-8502 東京都世田谷区桜丘1-1-1 * Yoshiko TANAHASHI, Tokyo University of Agriculture, 1-1-1 Sakuragaoka, Setagaya-ku, Tokyo 156-8502

方法がまとめられている。

第4章「学術コミュニケーションを支えるオープンなインフラ」では、プレプリントの現状やデータ引用の現状、「次世代リポジトリ」の展望や研究データ管理を担う人材育成について言及している。ここでは、将来の学術コミュニケーションを支える上でのインフラの重要性が語られている。

全体として本書はオープンサイエンスの概念、現在の課題、未来のビジョンを広範にわたり解説しており、オープンサイエンスという動きが、どのように学術コミュニケーションのあり方を変えているのかを理解することに役立てられよう。多様な事例と図解、豊富な参考文献も、新しい動向であるオープンサイエンスの実践的なアプローチを知るための一助となる。研究者、図書館員、学術コミュニケーションに関わる方々にとって、オープンサイエンスをより深く理解し、その推進に貢献するための貴重なガイドである。

なお、本書の用語集については、柔軟な差し替えが可能なウェブ上での公開がなされている。参照されたい。https://www.jusonbo.co.jp/OS_Glossary/index.php

事務局報告

2023年度第2回編集委員会

日 時：2023年9月20日（水）14：00～

場 所：Zoomによるオンライン会議

出席者：下田尊久委員長、棚橋佳子委員、長塚隆委員、余川浩太郎委員、尾崎聖太郎事務局長、上田広子事務局員

欠席者：なし

- 議 題： 1. 212号（2023年12月1日発行予定）の原稿依頼の状況確認
2. 213号（2024年3月1日発行予定）以降の原稿依頼について
3. （事務局より）
- 1）セミナーでの講演・事例紹介を踏まえた会誌への投稿記事について
- 2）（継続審議）原稿執筆要領の加筆について
4. その他

2023年度第2回セミナー委員会

日 時：2023年10月19日（木）10：00～11:00

場 所：Zoomによるオンライン会議

出席者：松下裕委員長、浅野康之委員、川端幸枝委員、福田直美委員、長塚隆会長、尾崎聖太郎事務局長、上田広子事務局員

欠席者：なし

- 議 題： 1. 今年度セミナーの開催について
2. その他

NPO法人日本農学図書館協議会では、投稿要領及び執筆要領を新たに規定し、読者の皆様に積極的に投稿していただくための環境を整えました。当面する図書館の課題や日常の図書館員の声など、自由にご投稿していただくことを願っています。ご不明な点は事務局までお問い合わせください。

【問い合わせ先】TEL：03-3408-5077 E-mail:jaald@nifty.com

日本農学図書館協議会誌 投稿要領

1 趣旨

この要領は、日本農学図書館協議会誌の投稿に関する取り扱いについて定めるものとする。

2 投稿者の資格

本誌に投稿できる者は、農学系図書館の活動に賛同する者とする。

3 執筆及び投稿要領

原稿執筆に当たっては、本要領及び別に定める原稿執筆要領に従うものとする。

4 投稿原稿の取り扱い

(1) 投稿原稿は会誌編集委員会においてその採否を決定する。

(2) 投稿された原稿は、原則として返却しない。

5 謝礼

(1) 執筆者には、原稿が掲載された「日本農学図書館協議会誌」を3部贈呈する。

(2) 投稿及び依頼原稿の稿料は別に定める。

6 著作権

(1) 本誌に掲載する著作物の著作権は、日本農学図書館協議会に帰属する。

(2) 執筆者自身が当該著作物の再利用を希望する場合、日本農学図書館協議会は、再利用が学術研究及び農学図書館業務改善の進展に資するものである場合は、これを認めることがある。

(3) 第三者から、論文の複製及び転載などに関する許諾の要請があり、日本農学図書館協議会が必要と認めた場合は、許諾することがある。

7 個人情報

編集の過程において入手した個人情報は、本誌の編集刊行に関する活動以外の目的には使用しない。

8 その他

(1) ホームページに発行した会誌の目次及び本文を逐次掲載する。会員は、発行されたパスワードにより会誌本文を直接閲覧することができる。

(2) 冊子会誌に掲載する図表、写真はモノクロとするが、ホームページにはカラーで掲載する。

(附則)平成27年8月1日より施行する。

2020年5月1日より施行する。

日本農学図書館協議会誌 原稿執筆要領

1 趣旨

この要領は、日本農学図書館協議会誌の原稿執筆に関する事項を定めるものとする。

2 投稿原稿は、次の要領で作成し提出する。

(1) 原稿の受付は、随時とする。

(2) 原稿は、Word形式もしくはテキスト形式を使用し、横書きで10,000字程度(図表・写真は1枚当たり250文字換算)とする。また、図表も原則として、電子化したデータで提出するものとする。刷り上りは4ページ程度を想定する。

(3) 文中の見出し番号の表記は、1. 1) ①とする。

(4) 図表の見出しは、図1及び表1とし、図の下および表の上に記したうえで、挿入箇所を本文欄外に指示する。

(5) 注記もしくは引用文献等は、本文の該当箇所右肩に1)と記し、原稿の末尾にまとめて記載する。なお、記載例は①及び②の通りとする。

① 編著者名『書名』(シリーズ名)出版社、出版年(西暦)、引用ページ

② 執筆者名「論文名」『雑誌名』巻号、発行年月、引用ページ

(6) 原稿には、表題及び英文タイトル、執筆者氏名、所属機関、住所及びローマ字名、所属機関、住所の英文名を添付する。

(7) 原稿の提出は下記宛てとし、日本農学図書館協議会事務局が受領した日をもって原稿受付日とする。

〒156-8502 東京都世田谷区桜ヶ丘1-1-1

東京農業大学 教職・学術情報課程内

NPO法人 日本農学図書館協議会事務局

TEL. FAX. 03-3408-5077 jaald@nifty.com

(8) 執筆者の校正は、再校までとする。

(9) 「別刷」を希望する者は、校正の際に必要な部数を日本農学図書館協議会事務局に連絡すること。なお、経費(実費)については、本人負担とする。

(附則)平成27年8月1日より施行する。

2020年5月1日より施行する。

(編集委員)

委員長	下田 尊久	個人会員
委員	棚橋 佳子	東京農業大学教職・学術情報課程
	長塚 隆	鶴見大学名誉教授
	余川 浩太郎	国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所
事務局	尾崎 聖太郎	日本農学図書館協議会

会 員 頒 布

日本農学図書館協議会誌 212号
2023年12月1日発行
発行人 長塚 隆
編集・発行 特定非営利活動法人日本農学図書館協議会
住 所 〒156-8502 東京都世田谷区桜丘 1-1-1
東京農業大学教職・学術情報課程
TEL&FAX : 03(3408)5077
e-mail : jaald@nifty.com
URL : <http://jaald.life.coocan.jp>
印 刷 所 (株)サン・プレーン
住 所 〒114-0014 東京都北区田端 6-1-1
田端ASUKAタワー17F

I S S N 1342-1905